

外国語学部

I	教育水準	教育 21-2
II	質の向上度	教育 21-5

I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 教育の実施体制

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、国際文化学科と地域文化学科が設置されてそれぞれに 5 専攻、10 専攻が置かれており、昼間主コース及び夜間主コースが開設されている。教員所属組織としては、国際文化学科に 5 講座、地域文化学科に 7 講座あり、専攻語教育の人員維持や女性教員比率の向上などが図られている。特に、トルコ語とハンガリー語の 2 専攻語に新たに外国人教員が配置されるなど、外国人教員確保に特段の配慮がなされているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、毎年ファカルティ・ディベロップメント（FD）研修を実施しており、そこでの検討を経て平成 16 年度にグレード・ポイント・アベレージ（GPA）制度を導入し、平成 18 年度にはアドミッション・ポリシーの策定につなげている。さらに、平成 19 年度からは留学を容易にする Semester 制を導入されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、外国語学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、外国語学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 教育内容

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「教育課程の編成」については、前期課程における専攻語・副専攻語科目及び言語教育科目をとおして、基礎的な言語運用能力を養成するとともに、後期課程においてはディシプリンに基づく専門科目や多面的な文化理解が可能となる専門科目が配置されている。教養教育と専門教育は区別せずに学生が自主的に履修することを可能にしており、全体として妥当な教育課程が編成されているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、海外協定大学との学術交流を充実させるとともに、 Semester制を導入して学生の留学機会を保障している。また、平成18年度からは「大学コンソーシアム大阪」における単位互換制度の開始、キャリア教育・インターンシップの整備・充実も図られているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、外国語学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、外国語学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成20年度及び平成21年度に係る現況を分析した結果、平成16～19年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第1期中期目標期間における判定として確定する。

3. 教育方法

平成16～19年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、総合科目、講義科目、専攻語実習科目、演習科目、研究外国語科目等多彩な授業科目が開講され、特に語学実習を中心に少人数授業が堅持されている。さらに、副専攻語としての英語教育においては TOEIC 等の受験義務を導入しているほか、全専攻語における到達度基準を国際的基準（CEFR）によって策定し、1年次・2年次の専攻語教育到達度目標を明確化しており、学生の学習目標の認識と自己評価を促しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、パソコン学習室運営や附属図書館の開館日数増をとおして学生の自習環境を整備するとともに、独自のマルチメディアコンテンツに基

づく言語学習教材を開発して学生の主体的学習を促進しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、外国語学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、外国語学部が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

4. 学業の成果

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、学生の単位修得率はおおむね 60% を越えている。また、1 年次・2 年次の進級率が昼間主、夜間主ともほぼ 80% という妥当な値を示しており、3 年次・4 年次には専門の講義・演習や卒業論文等とおおして適切な学習を行っているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、学生がそれぞれの専攻語に応じて然るべき運用能力と知見を獲得したと評価している。卒業生に関する就職先関係者のアンケートにおいても、高度な言語運用能力と異文化コミュニケーション能力を備えていることが評価されているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

以上の点について、外国語学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、学業の成果は、外国語学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

5. 進路・就職の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、卒業生全体の就職率は過去数年の実績が増加傾向にあり、平成 18 年度には 83.1%となっている。また、毎年 40 名から 50 名が大学院に進学している。こうした就職先、進学先のいずれもが日本各地に及んでいることは特筆に価するなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「関係者からの評価」については、平成 19 年 3 月に進路・就職先関係者を対象に卒業生に関するアンケートを実施しており、海外への興味・関心、外国語運用能力・異文化コミュニケーション能力の高さ、視野の広さ、バイタリティ、教養の高さ等が高く評価されている。現代社会の中で大きな能力を発揮する優れた人材を送り出しているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、外国語学部の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、外国語学部が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 3 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1

期中期目標期間終了時における判定として確定する。